

なみ き つねのぶ
漆工芸家 並木恒延さん

食器や家具・調度などに紋様として塗られる工芸品のイメージが強い漆ですが、並木恒延さんは、そこに初めて近代絵画の要素を取り入れました。

原画を作成し、黒漆を塗ったパネルに金粉や銀粉を蒔く「蒔絵」や砕いた貝を貼っていく「螺鈿」などの伝統的な技法を使って、原画を再構成します。何度も塗り重ね、磨き、陰影や奥行きを出していくのです。

その作品は豪華でありながら繊細、静謐で美しく、高い評価を受けています。昨年は第75回日本芸術院賞も受賞し、天皇、皇后両陛下の行幸啓を仰ぎました。

今回は並木恒延さんに、受賞やご自分の作品について伺いました。



第75回日本芸術院賞を受賞

——日本芸術院賞受賞おめでとうございます。これまでも数々の賞を受賞していますが、今回の受賞は格別の喜びがあったと伺いました。

並木 昨年6月の授賞式では、とにかく、天皇、皇后両陛下にお会いできるというのが本当に嬉しかったです。時間にして15分、緊張していてもしゃべったかあまり覚えていませんが、両陛下の素晴らしいお人柄に触れることができたことは覚えていいます。

——受賞作は「月出ずる」という80号の大作ですね。どのような想い

日本芸術院賞

卓越した芸術作品と認められるものを制作した方および芸術の進歩に貢献する顕著な業績があると認められる方に対して、毎年、日本芸術院から授与される賞

問合せ 広報広聴課広報係☎338

テレビはむらでも並木恒延さんの特集番組を放映しています。テレビはむらはYouTubeでも見ることができます。



漆との出会いは輪島

——漆との出会いは学生時代ですか。並木 月というモチーフは、肉眼で見た時の色が蒔絵で使っている金粉と同じなんです。そういう月の情景の中の羽村を描きたかった。この作品は、毎年2点作る大きな作品のうちの一つで、作る時は受賞などということはまったく考えていませんでした。作品を作るということは、我々作家にとっては日々の生活、日常そのものですから。

——漆との出会いは学生時代ですか。並木 美術大学在学中に、漆塗りで



▲日本芸術院賞受賞作の「月出ずる」80号（112cm×145cm）の大作

有名な石川県輪島出身の友達に誘われて、輪島塗りの工房で40日間お世話になりました。学校で習うのとは違って、朝は広い工房の雑巾がけで始まるんです。この工房での40日間の体験がなければ今はないわけです。——漆というと漆塗りや漆工芸が有名ですが、並木さんはなぜ漆で絵画を描こうと思ったのですか。並木 自分は絵が描きたくて美術大学に入りました。子どもの頃からそういうスタンスで育っていますから、漆が気に入ったからといって急に輪島塗りの職人になる、というわけにはいきませんでした（笑）。漆塗りというのは紋様の世界で、絵画ではない。でも「漆を材料に絵画を制作していこう」と決めることができました。——当時、漆という材料で絵を描く作家はいなかったそうですが、漆の魅力とは。並木 漆というのは自然物なんです。漆の樹液という生きている素材を使って作品にしていけるわけです。そういう点で非常に魅力的です。ただ、乾くのを待つ時間が必要です。例えば水彩画では1回の工程で仕上がるのところ、漆は材料も技法も積み重ねていきますから、そういう意味ではじれったいとも言えますね。



▲丁寧に、何度も塗り重ね、磨き、美しい作品に仕上げる。